

今回は、医療被ばくの低減と適正化をテーマに、ナイトセミナーを開催した。線量管理の義務化、DRLs2020 の公表なども相まって参加人数が 57 名に達し、この領域に関する関心の高さが伺えた。

前半は、日本診療放射線技師会が認定する被ばく低減施設について、現在取得に向けて準備を進めている秋田厚生医療センターの皆さんから、ご発表を頂いた。認定取得の目的は、法令に即した技師の育成、最適化設定の定期的見直し、医療被ばく適正化のための情報提供であり、取得のための要件を解説頂いた。また、各モダリティからは、取得のための改善例をご紹介頂いた。

一般撮影と CT 部門では、問題点として挙げられた自施設のデータ整備は臓器被ばく線量の算出で対応、ガイドラインとの比較は DRLs との比較で対応するとのことであった。透視・IVR 部門、および核医学部門では、行為の正当化、防護の最適化に沿って、患者被ばくの最適化における様々な取り組みの詳細を解説頂いた。

取り組みの他に重要なものとして、スタッフ間での情報共有を挙げられていた。これは被ばく低減施設認定に限った話では無く、全施設に共通することである。担当者・責任者だけの取り組みでは効果が限定的であり、施設全体で意識を高めることが効果的な被ばく低減に繋がり、施設認定も可能にすると考える。

後半は被ばくと画質に関連した内容の報告であった。工藤会員からは診断参考レベルの概念を解説頂き、線量、つまり数値だけではなく、画質と診断目的の整合性の重要性も解説頂いた。石川会員からは、自施設での腹部 CT 検査について、DRLs2020 からの撮影条件の見直しに至る取り組みをご紹介頂いた。見直し後の運用からまだ日は浅いが、取り組み方法の至適さから、今後の被ばく線量の適正化にも期待ができると感じた。廣川会員からは、心筋 SPECT 検査における投与量について、DRLs2020 をもとに見直しを行った取り組みについて報告頂いた。投与量を患者体型に沿って細かく設定し撮像条件を見直す事で、画質を変えずに投与量の適正化が可能と報告された。核医学領域では、従来からファントムによる画質評価を多施設で行っている。細かな投与量設定では画質の普遍さがネックとなりがちだが、ファントム評価結果をツールとすることで画質調整もしやすいのではないかと考えられた。

文責 大村知己